

(報告書)

## ルーマニアにおける水たばこ普及の現状と歴史的背景 —オスマン帝国の支配との関連で—

助成研究者 黛秋津 ((東京大学大学院総合文化研究科) バルカン史)

### 1. 研究目的

本研究は、中東を中心に広く見られる喫煙具の一つである水たばこに注目し、旧東欧のルーマニアにおけるその使用の現状と歴史的経緯を明らかにすることを通じて、複雑な民族・宗教・文化が共存するバルカンという「地域」を新たな視点から考察することを目的とするものである。

周知の通り、「バルカン」という地域認識は、過去の帝国支配という歴史的共通体験に基づいており、とりわけ 14 世紀から 500 年余りにわたってバルカンを支配したオスマン帝国の遺産は、今日のバルカン社会にも大きな影響を与えている。オスマン帝国は、イスラームを統治理念とするイスラーム帝国であったが、その領域にはキリスト教徒やユダヤ教徒など多くの異教徒を抱えていた。とりわけバルカン(オスマン帝国では「ルメリ (Rumeli)」と呼ばれる)では、人口の多くをキリスト教徒が占めており、多宗教・多民族を緩やかに統合するこの帝国に関しては、これまでに多くの研究がなされてきた。特に冷戦終結後の帝国研究の高まりの中で、同帝国についても様々な観点から実証研究が進められてきたが、人々の生活に密接にかかわる食や嗜好品などの分野に注目した研究はまだわずかしが行われていない。しかしながらこの分野は、帝国内の人と物と情報の動きや、宗教共同体を基盤とするオスマン帝国社会のあり方など社会経済史や文化史の観点、さらには帝国秩序の観点からオスマン帝国を考察するための一つの重要な切り口となる可能性があり、今後本格的な研究が進められなければならない領域であると考えられる。

本研究課題着想の出発点は、一つの素朴な疑問であった。それは、今日、水たばこというものは一般には「イスラーム」や「中東」などと結びつけられてイメージされているが、歴史的にイスラーム帝国の支配下に置かれていた非ムスリム臣民もこれと深く接していたのか、ということである。研究開始前において、筆者はキリスト教徒が水たばこをたしなんでいたという記述やそのような場面を描いた絵などに出会ったことはなかった。その一方で、水たばこはムスリムとキリスト教徒が共存するオスマン帝国において発達し、上述のようにキリスト教徒が多数居住するバルカンにも広がっていたため、それに接する機会にはキリスト教徒にも当然あったはずである。こうしたバルカン地域での水たばこ喫煙者は果たしてイスラーム教徒だけだったのか、あるいはキリスト教徒もそれを共有したのか。もしキリスト教徒もそれを用いてたばこを喫煙していたのだとすれば、その慣習はいつ頃

消えたのか。あるいは現在でもその伝統（あるいは痕跡）は社会に残っているのか。そして、水たばこ使用の広がりや、領域的主権国家とは全く異なる、オスマン帝国の多様なバルカン支配のあり方と何か関わりがあるのか否か。これらの疑問点を、明らかにすることが本研究の目的であった。



ルーマニア主要都市 地図

しかしながら、バルカン全域を調査することは時間的にも予算的にも困難であるため、今回は調査地をルーマニアに限定した。現在のルーマニアは歴史的に、オスマン帝国の直接支配を受け現在も一部イスラーム教徒が居住している、黒海沿岸のドブロジャ地方、間接支配を受け属国として留まった、キリスト教徒が大多数を占めるワラキアとモルドヴァ地方、そして間接支配を受けたものの比較的緩やかに支配され、17世紀末にはハプスブルク領となったトランシルヴァニア地方など、多様な帝国支配を受けた複数の地域から構成されており、研究開始時においては、本課題の考察対象として適していると考えたからである。

## 2. 研究方法

本研究の方法は、ルーマニアにおける水たばこについて、①フィールドワークによる現地調査と、②歴史的経緯を探るための史料の分析、の二つの柱からなる。

①については、ルーマニア国内のいくつかの都市を調査対象とし、繁華街や旧市街にある店舗等で、水たばこ使用の有無を確認と関係者から聞き取りを行うことによって、水たばこ使用の現状を把握し、また歴史・民俗博物館を訪問して、当該地方の伝統的な生活の中に水たばこが存在していたか否かを調査する。調査地は、後述の文献収集の必要もあるため、首都ブカレストでの調査が不可欠であるが、その他に、ルーマニア国内の各地方において2カ所前後の都市を選んだ。具体的には、間接統治ながらオスマン政府の強力な統制のもとに置かれたモルドヴァ地方の中心都市ヤシとドナウ流域のガラツィ、ワラキア地方西部でドナウ岸に位置するドロベタ・トゥルヌ・セヴェリン、オスマン政府の直接支配地で、現在でも国内のイスラーム教徒の多くが居住するドブロジャ地方の中心都市コンスタンツァとトゥルチャ、マンガリア、さらにトランシルヴァニア地方のクルージュ・ナポカなどの各都市である。

一方②については、先行研究文献を日本および現地収集してこれまでの研究状況を押

さえた後、一次史料の中に、たばことその喫煙具としての水たばこに関する記述を調べ、現在のルーマニアの領域における水たばこの普及、定着、あるいは衰退などの歴史的経緯を明らかにする、という手法を取った。ただ、水たばこのような道具に関しては、公文書にはほとんど登場しないと思われ、私文書というものがあまり残っていないオスマン帝国においては、このようなテーマを調査する際には史料的制約が伴う。筆者が今回注目したのは外国人旅行者の記述、すなわち旅行記である。旅行記には人々の生活についての描写も見られ、そうした中に食や嗜好品についての記述も一部存在する。その中に水たばこがどれ程言及されているのか、という問題はあるが、本研究課題を探るためにはこうした史料に依拠せざるを得ず、これはオスマン帝国領における嗜好品研究の大きな障害となっている<sup>1</sup>。ルーマニアでは、近世から近代にかけてその地を旅した外国人の旅行記をルーマニア語に翻訳しまとめた旅行記集が過去に出版されている。

このような現地調査と史料調査から、「1. 研究目的」の中で述べたような疑問を明らかにする。

### 3. 研究計画と実施状況

当初の計画では、4月の研究開始から8月までに、本課題に関する先行研究文献を収集し、その後8月下旬～9月上旬と11月前半にルーマニアで調査を行い、帰国後、先行研究調査とこの2度のフィールドワークで得られた情報、そして文献史料の分析を総合して、最終報告書を作成する予定であった。しかし、学務の関係で予定の変更を余儀なくされ、実際の現地調査は以下の日程で行った。

2014年5月3～12日ブカレスト、クラヨーヴァ、ドロベタ・トゥルヌ・セヴェリン

11月13～25日ブカレスト、コンスタンツァ、マンガリア、トゥルチャ、ガラツィ

2015年3月3日～14日ブカレスト、ヤシ、クルージュ・ナポカ

文献については、国内で参照できる文献はわずかであったため、可能な限りインターネット上で入手できるものは入手したが、それでも多くの文献をルーマニアで参照し収集する結果となった。全般的に、日本におけるルーマニア研究は蓄積が乏しく、研究者の層も薄い、今回の調査においてそのことを改めて実感することとなった。

---

<sup>1</sup> 近代エジプトにおけるたばこの社会・経済への影響を研究したシェクターも、同様の問題を指摘している。(Shechter 2006: pp. 17-18)

## 4. 研究成果

### 4-1 現在のルーマニアにおける水たばこ

筆者がルーマニアの首都ブカレストを訪れるようになってから15年余り経つが、街中で水たばこを見かけるようになったのは2005年頃からである。ガイドブックによれば、2015年現在、ブカレストには10軒あまりの水たばこを提供するカフェがあるが、その中でおそらく最も古く最も有名なのが、市の中心部、19世紀末に作られた、パリのパサージュ（ガラスの屋根付き小路）を思わせるマッカ＝ヴィラクロス・パサージュ（写真1）

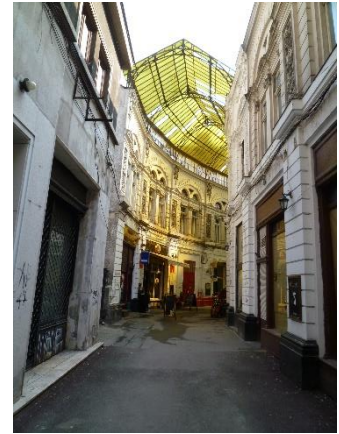


写真1

にあるカフェ「王の谷（Valea regilor）」であろう。年中無休のこのカフェは、トルココーヒーと水たばこを供し、特に夕方から夜中にかけて賑わっている。従業員と客の何人かにインタビューしたところ、客の多くはルーマニア人の若者であるが、ブカレストに居住するシリア人も利用しているとのことであった（写真2）。民族社会主義政党であるバアス党の一党独裁体制のシリアは、社会主義時代からルーマニアと友好関係にあるため人的交流も多く、ブカレストにはある程度の規模のシリア人コミュニティも存在するため、そうした人々が集まる場でもあるようである。この他に、市内には「アイダ・カフェ」、「クリシャナ・カフェ」などのカフェがあり、そこでも水たばこを吸うことが出来る。こうしたカフェの他、筆者が市内で水たばこを目にしたのは中東料理のレストランである。上述のカフェ「王の谷」の近くのレバノン料理レストランに水たばこがディスプレイされ、喫煙も可能とのことであった。また地方都市のコンスタンツァやヤシでも、トルコ料理レストランの店先に同様の光景が見られた。



写真2

首都ブカレスト以外の地方都市では、水たばこのあるカフェやレストランはまだ少数であるものの増加していることは疑いなく、また水たばこのネット通販サイト<sup>2</sup>によって国内のどこでも道具が入手できるなど、ルーマニアにおける水たばこ使用は着実に広がっているようである。

ところで、水たばこが供されるこれらの場所に共通するものを一言でいうならば、「オリエンタル」な雰囲気、ということになるだろう。エジプト、トルコ、レバノン、インドなど、いずれも東方の異国情緒と水たばこが結びつけられ、現在のルーマニア人の持つ水たばこに対するイメージは、他の欧米諸国の人々のそれと違いはないと考えられる。そこには、かつて自分たちの祖先も使用していた伝統的な道具であるという意識は全く見られない。

<sup>2</sup> 例えば、<http://www.narghileashop.ro/> <http://www.narghilea.ro/index.html> など。

では、ルーマニアにおいて、過去から今日までずっと水たばこを使用し続けている人々はいないのであるか。この疑問を解くために、調査に訪れた各都市の博物館で展示品や所蔵品のカタログを調査し、また学芸員への聞き取り調査を実施した。対象としたのは、ブカレストの農民博物館 (Muzeul țăranului român) と農村博物館 (Muzeul satului)、クラヨーヴァのオルテニア博物館民俗学部門 (Muzeul Olteniei Craiova, secția de etnografie)、ドロベタ・トゥルヌ・セヴェリンの鉄門郷土博物館 (Muzeul regiunii Porțile de Fier)、コンスタンツァの民衆芸術博物館 (Muzeul de artă populară) と歴史考古学博物館 (Muzeul de istorie națională și arheologie)、トゥルチャの (Muzeul de artă populară și etnografie) と歴史考古学博物館 (Muzeul de istorie și arheologie)、ヤシの国立モルドヴァ博物館群 (Complexul național muzeal „Moldova”)、アルジェシュ県ゴレシュティのゴレシュティ博物館群 (Complexul muzeal Golești)、そしてクルージュ・ナポカのトランシルヴァニア民俗博物館 (Muzeul etnografic al Transilvaniei) などの各博物館である。これらの 10 を超える博物館で調査を行ったが、いずれの場所においても、一つの例外を除いて水たばこの展示品はなく、他の喫煙具でさえも展示されている博物館はなかった。またインタビューした学芸員たちによれば、過去に農民が水たばこを使用していたという事実は聞いたことがなく、また各地方都市においても少なくとも第二次大戦後は水たばこの存在は確認できないとのことであった。次節で言及するように、ルーマニアのたばこに対する学術的な関心は非常に低く、先行研究も少ないため、彼らがこの問題について豊富な知識を持っているとは思えないが、少なくとも水たばこの存在が、ルーマニアにおいては広く一般に普及していたものではなかった可能性が高い。

上で述べた一つの例外というのは、ルーマニア南西部、ドナウ川に面するドロベタ・トゥルヌ・セヴェリンの鉄門郷土博物館である。そこの学芸員、ヴァルヴァラ・マネアヌ (Varvara Măneanu) 氏によると、博物館の所蔵品の中に水たばこはあり、それはドナウの中州の島「アダ・カレ (Ada Kaleh)」で 20 世紀半ばまで使用されていたもの、とのことであった。この水たばこはマネアヌ氏の著作の中にも写真で紹介されており (Măneanu 2005: p. 127)、今回現物を確認することは出来なかったものの、その存在は確実である。

アダ・カレとは、ドロベタ・トゥルヌ・セヴェリンのほぼ対岸に存在した島で、古くから軍事拠点として利用され、そのため近世以降「城塞島」(トルコ語で Ada は「島」、Kaleh は「砦」、「城塞」の意) と呼ばれる。オスマン帝国は 19 世紀にこの島の周辺領域を次々に喪失したが、この島は例外的に最後までオスマン領にとどまり、その後ルーマニアに編入された後もムスリムのトルコ系の住民が居住し続けた。その後、1970 年の鉄門ダム完成とともに島は水没し住民たちは離散したが<sup>3</sup>、それまで水たばこは使用されていたようである (写真 3 島の有力者の家の前の水たばこ)。

<sup>3</sup> アダ・カレの歴史について、まだまとまった研究はないが、とりあえず Țuțui 2010, Juan-Petroi 2005 を参照。



写真 3

このような一連のフィールドワークによる調査からは、ムスリムのトルコ系やタタール系住民は 20 世紀半ば頃まで水たばこを使用していたことが確認されたが、その一方で、ルーマニアの一般民衆の水たばこ使用は、少なくとも今日の歴史研究者や学芸員たちに広く知られるような一般的な習慣ではなかった、ということも明らかになった。

ひとまずこのような結果を得た上で、こうした踏査では明らかにできない近世から近代にかけてのルーマニアにおける水たばこの状況に関して、文献に依拠して研究を行った。

#### 4-2 ルーマニアにおける水たばこ使用の歴史

##### 4-2-1 ルーマニアのたばこの歴史に関する先行研究

博物館の展示品に喫煙具がほとんど見られないことから推測されるように、ルーマニアのこれまでの学術研究において、少なくとも今回調査した人文社会系の分野に関するたばこの研究はあまり行われていない。まず、ある程度の研究蓄積があるのではないかと期待した民俗学の領域では、たばこの喫煙や喫煙具はほとんど研究の対象となっておらず、ルーマニア科学アカデミーから出版されている、民俗学の基本文献『ルーマニア民俗学』(Ispas et al. 2006-13) にも喫煙具についての記述はほとんどなされていない。当然のことながら水たばこへの言及も皆無である。他の文献においても同様で、食や飲酒についてはある程度の研究がなされているものの、たばこに関する研究は見られない。こうした背景としては、推測の域を出ないが、たばこの喫煙という習慣が特定の民族や宗教と結びつくものではないため、近代以降のルーマニアにおいて諸学問が、国民のナショナル・アイデンティティ形成と確立を側面から支える役割を果たしてきたことを考えると、こうしたテーマは決して研究の主流とはなり得ないことは指摘できるだろう。

その一方で、比較的研究がなされているのが考古学の分野である。ルーマニア各地で出

4 トルコ系やタタール系などのムスリムコミュニティーに特化した博物館や図書館などはなく、調査はコンスタンツァのカロル 1 世モスク (Moscheea Carol I) とフンキヤルモスク (Geamia hunchiar)、マンガリアのエスマーハン・スルタンモスク (Moscheea Esmahan Sultan) において、それぞれ 2~3 名のイスラーム教徒 (40~70 歳台) から話を聞いた。

土したクレイパイプについての研究が主で<sup>5</sup>、その中には近世以降たばこの喫煙に使用されたパイプも含まれる (Costea et al. 2007)。

歴史学の分野では、前述の史料的な制約もあって研究は少ない。ルーマニアにおけるたばこの歴史の先駆的研究は、1929年に出版された『たばこ小史研究』(Gavriliu 1929)であるが、その後長らく研究は現れず、近年になってようやく、文化史家オイシュテアヌがルーマニア文化に果たしたドラッグの影響を明らかにした論考の中で一部たばこを論じ (Oişteanu 2011)、また地域的に限定されるが、近世トランシルヴァニアの喫煙を取り上げる若手研究者の論文 (Gruia 2012a) などが現れ始めた。このように、ルーマニアにおけるたばこ史研究は、着手されたばかりと言ってもよい状況である。

しかし、ルーマニアのこうした研究状況が特殊であるとも言えないようである。葉たばこ栽培からその加工まで、一連のたばこ生産が経済の重要な位置を占めているブルガリアでは、経済史や産業史の観点から一定の研究が行われているが (Neuburger 2013)、それ以外のバルカン諸国では、研究状況はルーマニアとそれ程変わらないようであり (Fotić 2011) さらにオスマン帝国全体を見渡しても研究はかなり限られている。

#### 4-2-2 ルーマニアにおけるたばこと水たばこの導入

まず、現在のルーマニアの領域では、たばこがもたらされるよりもずっと以前から、喫煙の習慣が存在していたことを指摘しておきたい。紀元前にこの地を支配していたのはトラキア人の一派であるダキア人であったが、彼らは、一説には黒海北岸に広がるスキタイから伝わったとされるアヘンや大麻をパイプで喫煙する習慣をすでに有していた (Oişteanu 2011: pp. 42-44)。そうした習慣は各地に広まり、中世の農村では、広くアヘンや大麻が鎮痛の目的で喫煙され (Butura 1979: p. 72)、その他、チョウセンアサガオ、フキタンポポ、ラベンダーなども薬効のあるものとして喫煙された (Gavriliu 1929: p. 23)。すなわち、たばこが新大陸からもたらされるよりもずっと以前に、ルーマニアの領域では、喫煙の習慣とパイプの普及が見られるのである。

たばこのルーマニアへの導入は、16世紀末ごろとされる。現在のルーマニアを成す、当時のオスマン帝国の3つの附庸国、ワラキア、モルドヴァ、トランシルヴァニアにたばこがもたらされたルートは、一つにはオスマン帝国中心部から、もう一つには中欧からとされるが<sup>6</sup>、たばこ喫煙文化は圧倒的にオスマン帝国の中心部、すなわちイスタンブルからの影響を受けていた。それはたばこに関する語彙に表れている。例えば、現代のルーマニア語でたばこは *tutun*、水たばこを *narghilea*、柄が長めのパイプを *ciubuc*、柄が短めで太いパ

<sup>5</sup> 比較的最近の研究成果としては、Gruia 2012b, Radu-Iorguş et al. 2013 など。

<sup>6</sup> 北東部からタタール人やカザーク (コサック) によって最初にもたらされたとする説もある (Gavriliu 1929: p. 27)。

イブを *lulea* というが、いずれもトルコ語からの借用語であるし<sup>7</sup>、また現在ではあまり使われないが、「たばこを飲む (*a bea tutun*)」という表現も、トルコ語の「*tutun içmek*」から入ったものである。間接統治とはいえ、帝国秩序に連なっていたこれらの付庸国にとって、前近代においてはイスタンブルが文化の発信地であった。

続く 17 世紀は、ユーラシアの他の地域と同様、ルーマニアにおいてもたばこの普及の世紀である。この時期は各地でたばこの喫煙や栽培を禁止する権力側と、それに抵抗する民衆側の静かなせめぎ合いが見られた。オスマン帝国においては 17 世紀前半に皇帝アフメト 1 世 (在位 1603–17) とムラト 4 世 (在位 1623–40) がたばこの禁止政策を推し進め、一部のウラマー層もそれを支持し、さらにキャーティプ・チェレビーやアフマド・アル＝アクヒサーリーなどの知識人もたばこ反対の論陣を張った (Katib Chelebi 1957, Aq̄iṣārī 2010)。ワラキアとモルドヴァでもたばこに対して正教会が反対を示したが、たばこの普及は急速に拡大し、栽培も始められた。17 世紀末にはモルドヴァでたばこ栽培に対する「たばこ税 (*tutunăritul*)」が現れ、これは禁止から課税への転換と見なし得る (Oiṣteanu 2011: p.100)。

このような中で、たばこ喫煙のためにルーマニアで用いられた道具の一つが水たばこであった。よく知られているように、水たばこは 16 世紀のインド、あるいはイランを起源とし、元々ハシシの喫煙のために使用されていたが、たばこの普及とともにその喫煙具として中東全体に広がり、オスマン帝国においても 17 世紀以降各地で用いられた。オスマン帝国では、サンスクリット語を語源とし、ペルシア語を経由して伝わったナルギレ (*nargile*) の名で呼ばれ、ルーマニアを含むバルカンの各言語でもこの名が用いられている。ルーマニアにおける水たばこの使用が史料から確認されるのは、17 世紀後半のことである。1678 年にワラキアの首都ブカレストにやってきたハンガリー人エージェントの報告の中に、地元のボイェール (貴族) たちに関する記述があり、彼らはあらゆる物事をイスタンブルに倣い、部屋をイスタンブル風の家具で飾り、ソファーをしつらえ、その脇にコーヒーを置くための小さなテーブルを用意し、そして香りを強くするために水を通す巨大なパイプで喫煙する、と伝えている (Iorga 1928-29: vol. II: p. 68)。18 世紀以降の外国人の旅行記では、貴族の家を訪問すると、食後にコーヒーとたばこが供されるとの記述が多く見られ<sup>8</sup>、また 18 世紀初頭のモルドヴァ公で、オスマン帝国史の著作でも知られるディミトリエ・カンテミール (1673-1723) も、朝 5 時に起床して、「オスマン風の習慣に従って」目覚めのためにまずコーヒーと水たばこを飲む習慣があったとされる (Lemny 2010: p.101)。さらに 18 世紀後半の史料には、支配者である公の宮殿でパイプの管理をするチュブクジュや水たばこを管理するナルギレジという役職が見られる (Fotino 1859)。これらのことから、18 世紀には公や貴族の間で喫煙の習慣が定着していたことは疑いない。やや時代は後になるが、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活躍したボイェール出身の歴史家ラドゥ・ロ

<sup>7</sup> しかし、パイプの総称にはラテン語起源の *pipă* を用いる。

<sup>8</sup> そうした史料の一例として、Călători 1983: p. 378.



セッティは、その回想録の中で、子供のころ聞いた話として、ボイェールについて、カンテミールと同様にコーヒーとパイプが朝の習慣となっていることを述べ、「ボイェールたちは次から次へとパイプを吸っており (Boierii fumau ciubuc după ciubuc)」という表現で、彼らの喫煙がかなりの頻度であったことを伝えている。またロセッティは同じ個所でボイェールの多くは水たばこをより好むとも述べており、おそらく 19 世紀前半まで水たばこが日常的に使用されていたことがわかる (Rosetti 2013: p. 67)。現在でもいくつかの博物館で、彼らが使用していた水たばこが展示されている (写真4 プロイェシュティのハジ・プロダン家博物館所蔵)。

貴族の喫煙について付け加えるならば、上述の 1678 年のエージェントの報告は、ボイェールたちが普段持ち歩くものの一つとして、柄の長いパイプがあることを伝えている。これは 18 世紀末から 19 世紀前半のボイェールの肖像画によく見られるものであり、流行と権力を象徴するものであった (11 ページ写真5 参照)。

このように、公やボイェールたちが水たばこを使用していたことは明らかであるが、その他の人々は果たしてどうだったのか。まず都市について、庶民が自宅で水たばこを使用した喫煙を行っていたのかどうかは、旅行記などの史料からはいかがい知れないが、街中での使用については多少の手がかりが得られる。ヨーロッパと同様にオスマン帝国においても、



写真4

たばこの普及はコーヒーハウスの広がりと同様に進展したことが知られている。16 世紀半ばにイスタンブールに入ったコーヒーは、その後わずかの間に帝国各地に広まり、バルカンにおいても広く普及した。そして、各地にコーヒーハウス (kahvehane) が作られ、バルカンのサラエヴォに 1591/2 年にすでに現れていたとの記述もあるが、本格的に広まったのは 17 世紀のことであった。このコーヒーハウスは、ほぼ同時期に広まったたばここと結びつき、コーヒーとたばこを目当てにする人々を引き付けるようになる<sup>9</sup>。すべてのコーヒーハウスにあったのかどうかは定かでないが、水たばこのあるコーヒーハウスは確実に存在しており、そこに人々が集い、長時間滞在した (Gavriliu 1929: p.100, Fotić 2011: p. 97)。ワラキアの首都ブカレストで最初のコーヒーハウスが現れたのは 1667 年のことであるが、その後次々と新たな店がオープンしていった。当初はトルコ人やアルメニア人、ギリシア人などの非ルーマニア系の市民層が主な客層であり、また経営者もそうした人々が多かったが、18 世紀以降次第にルーマニア系住民も増加した (Potra 1981: pp. 219-220)。水たばこは、このようなコーヒーハウスに集う都市中間層にも利用されていたことは間違いない。

<sup>9</sup> オスマン帝国の都市におけるコーヒーハウスの社会的機能を考察したものとして、Mikhail 2007.

コーヒーハウスにおいてどの程度人々が水たばこを使用していたのかについては明らかにすることが困難であるが、ムスリムが多く利用する帝国直轄地のコーヒーハウスと比較して、水たばこの重要性はやや低かったのではないかと推測される。何故なら、ワラキア、モルドヴァ、トランシルヴァニアの各国へは、商人や使節など政府の許可を持つ以外のムスリムの立ち入りが禁止されていたため、住民のほとんどがキリスト教徒であり、オスマン帝国の他の地域では、ムスリム街区にあるコーヒーハウスではアルコールを供さず、たばことコーヒーを目的に客が訪れていたが、キリスト教街区においては食事と酒を提供し、機能がより多様であったためである (Fotić 2011 : pp. 92-93)。特に飲酒をしながらの水たばこの喫煙は難しく、自然とパイプによる喫煙になるだろう。その点がムスリム地区のコーヒーハウスと異なる点である。とはいえ、都市においては水たばこが、少なくとも貴族以外の一部市民にとって決して縁遠いものでなかったことは確かなのではないだろうか。では、都市以外の農村ではどうであろうか。これについて語ってくれる史料は手元になく、またそうした史料はおそらくほとんど存在しないに違いない。管見の限り、地方において水たばこの存在を表す史料の記述はなく、また今回実施した現地調査でも、その痕跡を見ることはなかった。さらに冒頭で述べたように、たばこの導入と普及以前からパイプを使用した喫煙の習慣があることなどを考えると、地方農村にはほとんど普及していなかったと考えるのが妥当ではないかと思われる。

#### 4-2-3 近代化の中の水たばこ

以上のように、17世紀以降、現地貴族層と一部の都市市民層が使用していた水たばこは、19世紀に入ると次第に姿を消してゆく。結論を先に述べれば、それはルーマニアの近代化の動きと連動したものであった。

17世紀末のカルロヴィッツ条約でトランシルヴァニアをハプスブルク帝国に割譲したオスマン帝国は、18世紀後半のロシア・オスマン戦争で敗北し、1774年のキュチュク・カイナルジャ条約により、ロシアのバルカンへの進出を許す<sup>10</sup>。オスマン帝国のバルカン支配の動揺とヨーロッパ列強の本格的な進出により、バルカンでは19世紀初頭から民族運動が見られるようになるのである。ワラキアとモルドヴァは、ともにロシアと同じ正教を信仰しながらもラテン系の言語を母語とし、古代ローマ人の末裔としての「ラテン性」を、オスマン帝国からの自立と国家の統合の象徴としてゆく。イタリアが統一を果たしていない当時、ラテン国家とはフランス以外にありえなかった。そのため、1830年代頃からフランスをモデルとした近代化が進められ、進歩的な自由主義ボイェールたちはパリへ遊学し、故郷に様々な文化や習慣を持ち帰った。著名な美術史家のアドリアン・ヨネスクはその主著『流行と都市社会』の中で、19世紀前半の貴族層の服装の西欧化の過程を明らかにして

---

<sup>10</sup> このロシアのバルカン進出にとって、1774年の条約が持つ意義に関しては、黛 2009。

いるが、高位のボイェールほど服装や習慣は保守的であり、1840-50年代においても伝統的な衣装でソファーに座り、柄の長いパイプを持つ姿で肖像画に描かれる一方(写真5)<sup>11</sup>、



写真5

ランクの低いボイェールたちは比較的早く洋装を取り入れていたことを明らかにしている (Ionescu 2006: pp. 71-131)。そして過渡期には、シルクハットをかぶり服装はドイツ風のボイェールたちが、トルコ風に座って長いパイプを吸っている、などという奇妙な光景も見られたようであるが (Ionescu 2001: p. 111)、ワラキアとモルドヴァが統一を果たした1859年以降は、社会

のあらゆる面が急速に西欧化され、かつて全てを「トルコ風」にすることを必死に追い求めたボイェールたちも、「トルコ風」の風俗習慣を捨てることになる。

このような社会の動きとほぼ同時期にルーマニアに流入したのが、使用が容易なヨーロッパ製の木製パイプと紙巻きたばこであった (Oişteanu 2011: pp. 172-173)。貴族の間では従来の水たばこや柄の長いパイプは使用されなくなり、またコーヒーハウスでは、1840年代にはまだ水たばこの存在が確認できるが (Alecsandri 1845)、その後はおそらく減少していったと考えるのが自然なように思われる。こうして水たばこはルーマニア社会から徐々に姿を消してゆくことになるが、その中で水たばこにはいわゆる「東洋」のイメージが強く与えられるようになった。今回、絵画についてはほとんど調査する時間はなかったが、19世紀後半以降パリで勉強したルーマニア人画家の中には、東洋趣味の色濃い作品を描くテオドル・パラディ (Theodor Pallady, 1871-1956) のような画家も現れ、いくつもの作品の中に水たばこを描いている (写真6 オダリスク)<sup>12</sup>。

1878年にルーマニアはオスマン宗主下から完全に独立してオスマン帝国からドブロジャ地方の一部を獲得し、国内にムスリムのトルコ人やタタール人を少数民族として抱えることとなった。前述のアダ・カレのトル

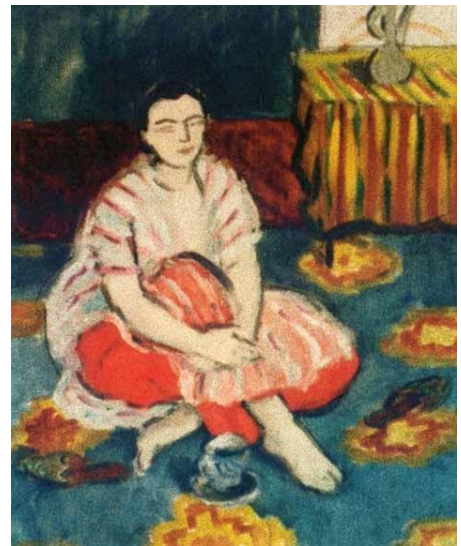


写真6

<sup>11</sup> フランス人画家デッソール (Ch. Dessault) によって1843年ごろに描かれたゲオルゲ・フィリペスク (Gheorghe Filipescu) の肖像画。

<sup>12</sup> オダリスクとは、イスラーム君主のハレム(後宮)に仕える女奴隷のことで、フランスの画家を中心に、19世紀後半、モチーフとして好んで取り上げられた。

コ系住民もその一部である。独立を果たし、西欧化するルーマニアにとっての「トルコ」は、かつての自らを支配する存在から自分たちが支配する対象となり、多数を占めるルーマニア系住民にとって水たばこは、西欧から受け売りのオリエント表象の一つとなり、一方国内のムスリムにとっては守るべき伝統と映ることになる。こうして社会の支配層の生活に不可欠な道具であった水たばこは、かつての流行の先端と帝国の都に対する憧れの対象であったが、近代以降は異国の異質なものとして認識され、今日に至っていると考えられるのである。

#### 4-2-4 今後の課題

今回の調査において明らかになったことはまだわずかである。まず、近代以降栽培が盛んに行われ、経済的に重要な役割を果たしてきたたばこに関する研究がほとんど行われておらず、その喫煙具についてもあまり関心を持っていないという状況は予想外であり、今回の研究に必要な足掛かりとはならなかった。また、一次史料として使用した旅行記も、期待したほどの記述が見られず、十分な情報を与えてはくれなかった。この点に、先行研究があまり行われていない理由の一端を垣間見た気がするが、今後この課題の研究をさらに進めるとすれば、未刊行の文書史料の使用が必要となるだろう。またそれと同時に、帝国の他の領域との比較、特にドナウの南の他のバルカンとの比較を行うことは、本課題にとって有益であることは疑いない。

## 5. 引用文献

Alecsandri 1845 : Vasile Alecsandri, Iași în 1844  
([http://www.vasilealecsandri.eu/opere/nuvele/iasii\\_in\\_1844.html#.VUKwR2wcSM8](http://www.vasilealecsandri.eu/opere/nuvele/iasii_in_1844.html#.VUKwR2wcSM8) 2015年4月30日閲覧)

Aqhişārī 2010 : Aḥmad al-Aqhişārī, trans. Yahya Michot, *Against Smoking: An Ottoman Manifesto*, Leicestershire.

Costea et al. 2007 : I.Costea, A.Stănică, A.Ignat, “Pipe de lut descoperite la Babadag”, *Peuce, S.N.* 5, pp. 335-362.

Fotić 2011 : Aleksandar Fotić, “The Introduction of Coffee and Tobacco to the Mid-West Balkans”, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 64-1, pp. 89-100.

Butura 1979 : Valer Butura, *Enciclopedie etnobotanicoă românească*, Bucureşti.

Călători 1983 : *Călători străini despre Țările Române*, vol. 8, Bucureşti.

Fotino 1859 : Dionisie Fotino, trad. George Sion, *Istoria generală a Daciei, sau a Transilvaniei Țărei Muntenesti și a Moldovei*, tomul III, Bucureşti.

Gavriliu 1929 : Dima I. Gavriliu, *Contribuțiuni la istoricul tutunului până la înființarea monopolului în România*, Iași.

- Gruia 2012a : A. M. Gruia, “Regional Traits of Smoking in the Autonomous Principality of Transylvania”, *Annales Universitatis Apulensis Series Historica*, 16-2, pp. 217-234.
- Gruia 2012b : A. M. Gruia, “Pipele de la Reghin”, *Apulum* 49, pp. 259-280.
- Ionescu 2001 : Adrian-Silvan Ionescu, *Modă românească (1790-1850). Între Stambul și Paris*, București.
- Ionescu 2006 : Adrian-Silvan Ionescu, *Modă și societate urbană în epocii moderne*, București.
- Iorga 1928-29 : Nicolae Iorga, *Istoria Românilor prin călători*, ediția a II-a, 4 vols., București.
- Ispas et al. 2006-13 : Sabina Ispas et al. ed., *Etnologie românească*, Vol. 1-3, București : Editura Academiei Române.
- Juan-Petroi 2005 : Constantin Juan-Petroi, *Ada-Kale: Monografia unei insule scufundate și a comunității care a locuit-o*, Galați.
- Katib Chelebi 1957 : Katib Chelebi, trans. G. S. Lewis, *The Balance of Truth*, London. (オリジナルは 1889 年カッタブ・ケレビの著、ミザン・アル・ハク フィ・アヒヤル・アル・フスطنطينيه)
- Lemny 2010 : Ștefan Lemny, trad. M. Jeanrenaud, *Cantemireștii: Aventura europeană a unei familii princiare din secolul al XVIII-lea*, Iași.
- Măneanu 2005 : Varvara M. Măneanu, *Tezaur din Ada-Kaleh*, Craiova.
- Mihalache & Andreescu 2013 : C.Mihalache & M. Andreescu, *Adakele-li: Patria din buzunarul de la piept*, București.
- Mikhail 2007 : Alan Mikhail, “The Heart’s Desire: Gender, Urban Space and the Ottoman Coffee House”, in Dana Sajdi ed., *Ottoman Tulips, Ottoman Coffee: Leisure and Lifestyle in the Eighteenth Century*, London & NY: Tauris Academic Studies,
- Newburger 2013 : Mary C. Newburger, *Balkan Smoke: Tobacco and the Making of Modern Bulgaria*, Ithaca & London: Cornell University Press.
- Oișteanu 2011 : Andrei Oișteanu, *Narcotice în cultura română : Istorie, religie și literatură*, București : Editura Polirom, ediția a II-a.
- Potra 1981 : George Potra, *Din București de altădată*, București.
- Radu-Iorguș et al. 2013 : C. Radu-Iorguș, L. Radu, M. Ionescu, “Pipe ceramice descoperite la Mangalia”, *Peuce S.N.*, 11, pp. 239-254.
- Rosetti 2013 : Radu Rosetti, *Amintiri : Ce am auzit de la alții. Din copilărie. Din prima tinerețe*, București: Editura Humanitas.
- Shechter 2006 : Relli Shechter, *Smoking, Culture and Economy in the Middle East: The Egyptian Tobacco Market 1850-2000*, NY and London: I.B.Tauris.
- Țuțui 2010 : Marian Țuțui, *Ada-Kaleh sau Orientul scufundat*, București.
- 黛 2009 : 黛秋津「ロシアのバルカン進出とキュチュク・カイナルジャ条約(1774年)—その意義についての再検討—」『ロシア東欧研究』37, pp. 94-105.

## 6. 英文アブストラクト

### The Present Situation and Historical Background of the Water Pipe in Romania : in the Context of the Ottoman Order

This study aims to research the history of the Balkans from a different viewpoint by focusing on the present situation and the history of the water pipe in Romania. Field research and the examination of the primary sources like travelogues have been made for this aim and the following three points were made clear. Firstly, there are few who traditionally use water pipe in Romania and now the Romanians have an image of it as oriental objects. Secondly, according to the research of the primary sources, the water pipes for smoking tobacco were introduced in Romania in the seventeenth century and their main users were the noble class (boieri), and urban citizens in the coffeehouse. The peasants in rural areas, however, did not seem to use them. Thirdly, in the first half of the nineteenth century, with the beginning of the modernization in Romania, the Turkish style custom among the noble class was replaced with the European style and the water pipes were gradually disappeared from the modern Romanian society.